

27PA-am107

日本漢方黎明期における漢方処方への命名法に関する研究

○鈴木 達彦¹ (1帝京平成大薬)

【目的】田代三喜とその弟子の曲直瀬道三は日本漢方の黎明期にある医家である。道三の『切紙』には「註名無盡之一紙」という篇があり、漢方処方の命名法が記されていると考えられるが、その内容は理解されていない。本研究では三喜、道三の著書を比較検討して本篇の内容を明らかにし、日本漢方における処方の命名法とその意義の一端を明らかにする。

【方法】田代三喜『當流能毒集』(エーザイ内藤記念くすり博物館所蔵)に附される「療養註名之枢径」と曲直瀬道三『切紙』「註名無盡之一紙」の比較により漢方処方の命名法について検討した。

【結果・考察】『切紙』「註名無盡之一紙」は柁目のある図表であり、柁の中央には「潤」、「要」、「聖」などの文字が1つずつ記され、柁の周囲に小字で「金」、「風」、「神」などが1柁に5~21個記される。図表の説明は見られず、本篇がどのような内容を伝えているか理解できない。一方、『當流能毒集』は三喜の薬物書であり、そこに附される「註名無盡之一紙」は道三の初期の書き込みと考えられ、『切紙』「註名無盡之一紙」の旧態を伝えているとみられる。ここでは周囲に配置される文字から、中央に配置される文字に線が引かれている。これは、周囲の文字と中央に配置される文字を組み合わせて処方名にする命名法が記されていると理解される。このような命名法は、初期の曲直瀬流が規制の処方を用いず、患者ごとに1つ1つの生薬を組み上げてテーラーメイドの察証弁治による治療法を行っていたことから、その都度処方名をつける必要があったことに起因すると考えられる。明治期の文献にもこうした命名法がみられるが、ここでは処方内容を患者から秘匿にするためとみられ、黎明期の日本漢方とは異なる意図が確認される。